資料1

令和７年度 第１回 くるめ支え合うプラン推進協議会 議事要旨

開催要領

１　日　時　令和７年７月７日（月）　１４時００分～１５時３５分

２　会　場　久留米市総合福祉センター　２階大会議室

３　出席者　委員１８名
佐藤（美）委員、江頭委員、重石委員、立石委員、藤木委員、縄崎委員、中村委員、北岡委員、藤野委員、尾花委員、森山委員、濵﨑委員、川崎委員、船津委員、牛島委員、刈茅委員、江上委員、佐藤(寿)委員

４　欠席者　委員７名
髙田委員、橋本委員、津野委員、村井委員、藤田委員、永野委員、岩﨑委員

５　傍聴者　なし

次第及び議事要旨

１　開会
新任委員（５名）自己紹介

２　報告事項
（１）令和６年度 第３回 協議会 議事要旨について
※資料配布のみ

３　協議事項
（１）第２期くるめ支え合うプラン骨子（案）について

【主な質疑応答・意見等】

委　員：本編６ページ、上から４行目。「既存の支援では対応できない本人・世帯と社会とのつながりづくりを行う参加支援事業について。自分も所属しているAU-formal実行委員会が参加支援事業を受託し、「叶え合う支援」に取り組んでいるため、紹介したい。従来の制度の狭間に対するアプローチにおいては、課題を解決する視点で取り組んできたが、「叶え合う支援」では、市民団体の強みを活かし、本人の夢や可能性に着目して関わっている。事例として、長年引きこもっていた青年が、外に出て何かをやりたいという時期に、最初は軽作業をしていた。そのうちに、「一緒に走りたい、運動したい」という呟きがでてきた。そこで、

「一緒に走ることならできる」という方や過去に陸上経験のある方など仲間を募って、陸上競技場のサブトラックで練習。さらに、その青年に「福岡マラソンに出たい」という希望が出てきたため、久留米ガスさんの協力で、模擬マラソンを実施した。また、マラソン大会に出る参加費を捻出するために、本人が自らポスティングのアルバイトを見つけてきた。福岡マラソンに出場し、見事完走することができた。彼の夢がみんなの夢にもなった。紆余曲折ありながらも、就職活動に向けて、前向きに取り組むことができている。他にも、家の中で昼夜逆転した生活をしていたり、日中家にひきこもりがちな子どもたちなどが人との関わりを持てるよう、地域の部活動として、「じじっか」でのゲーム部や「日々カフェ」でのアート部などを開催している。市民の中に「関わりしろ」が生まれてきていると感じている。ぜひ、次期プランにも「叶え合う支援」の要素を取り入れていただきたい。

会　長：インフォーマルな活動の中で、課題ではなく、可能性に着目して、みんなが楽しみながら前向きに取り組まれているのが大変素晴らしい。この動きがあることが、久留米の誇りだと感じる。本プランにおいても、フォーマルとインフォーマルがともに関わり、進めていく必要があり、取り入れていきたい視点である。

委　員：本編２ページ。「男女共同参画行動計画」の記載が入ったのは嬉しい。図の表記として、行動計画と自殺対策計画の間が「…」とあいている意図は何か。また、本編４ページの「２－２地域の状況」に関連し、ライフスタイルが変化している中で、今まで地域の担い手だった高齢者が働いている状況である。今までの担い手とは違うところに担い手を探していかないといけないと思う。

事務局：本プランは、福祉の各計画に横串を刺すようなものである。本来ならばあらゆる計画に本プランの考え方は必要だと思うが、様々な計画がある中で、すべてを記載することが難しいため、「…」と表記し、特に大事にしたい視点として、「男女共同参画行動計画」を取り出して記載している。

また、担い手の課題については、ご指摘のとおり、地域の活動者として、退職後の生活の中で担っていただくというのは難しくなっている状況がある。そのような中で、各校区で取り組まれている支え合い推進会議の中で、様々な世代の方や事業所など多様な主体が関わることで、活動者を広げていこうという取組みも行っている。みんなで進めていけるような環境づくりを行っていきたいと考えている。

会　長：現在、単身世帯が増えている。特に、就職氷河期の世代。その方々は地

域とのつながりが薄いとの調査結果もあるようだ。これまでは、PTA など子どもを通して地域活動に関わっていた方もいたが、単身者が増えれば、地域福祉の担い手の課題は増々厳しい状況になるだろう。それらも踏まえて、第２期プランを見ていく必要があると感じている。

委　員：資料 22 ページの図について。包括的相談支援事業の「こども子育てサポートセンター」の下部に、子どもの部署の記載がないのは何か意図があるのか。

また、包括的相談支援事業の中で、課題が出た場合に重層の会議に挙げる流れを教えていただきたい。

事務局：こども子育てサポートセンターは市の直営である。その他は委託であるため、分野ごとの担当課を記載している。

多機関協働事業・重層会議への流れについては、まず各相談支援機関にて、担当分野でなくても一旦受け止めた上で、担当機関につなぐなど連携強化の中で対応。その上で、制度の狭間や複合的な課題があり、従来の体制では支援が難しい場合に、「多機関協働事業者（市社協へ委託）」へ相談していただいている。重層会議は、毎月開催しており、必要に応じて会議に挙げてケース検討を行っている。

委　員：毎月重層会議をしているとのことだが、各分野の割合はどうか。子どもの重層支援はあまり聞かないが、実際にあっているのか。

事務局：現時点で具体的なデータは持ち合わせていないが、例えば、生活困窮世帯の支援において子どもが含まれていたり、高齢世帯に障害のある子がいるなど複合的な事例は複数ある。

委　員：民生委員には、重層支援の話が入ってこない。生活困窮世帯にいる子どもの状況など、どのような事例があるか改めて教えていただきたい。

委　員：本編９ページ。地域と市社協と市となっており、見やすくなっていると思う。一方で各取組みに対して、市の担当課を記載してほしい。

本編８ページ。取組項目「５災害時支援に備えた取組み」について、市の課題として、避難所の整備、充実があると思う。

事務局：本プランは、福祉関係の各計画に横串を刺すものであり、担当課を割り振ることによって他人事にしてほしくないという思いがある。例えば、「多世代が交流できる居場所づくりを進める」ということに対しては、子ども分野、高齢者分野、障害分野、生涯学習など多分野に関連する。課を限定するのが難しい部分もある。資料編等で工夫できる部分はあるかもしれないため、検討させていただきたい。本編は、わかりやすさを重視したい。

また、避難所の充実に関しては、障害の分野で、福祉避難所（総合福祉

会館）において医療的ケア児が避難できるような設備を整えている状況。ハード面の充実も進めつつ、まずは避難が必要な人がどこにいるのかを把握することや、声かけができるような福祉的な関わり合いの仕組みづくりをプランに掲げていきたいと考えている。

委　員：篠山校区在住。初めて篠山校区でワークショップを実施した。色々な課題も出てきた。今後それらをどう進めていくか。また、ワークショップのスキル習得などは、校区コミュニティに任せるのか、プランに掲げていくのか。

事務局：ワークショップについては、地域性を鑑み、５圏域（宮ノ陣校区、篠山校区、柴刈校区、青木校区、高良内校区）で、支え合い推進会議と共催で実施した。具体的にプランに落とし込むというより、支え合い推進会議で地域の意見として吸い上げていただき、校区の活性化に向けて一緒に考えていきたい。

委　員：本協議会の委員と地元住民の一員という立場があり、両面で見ている。やっていることの成果を見せていく必要がある。プランの目指す姿に近づくためのスキルなども必要になると思う。

会　長：ワークショップという手法を用いて、平等に意見交換ができることがよかったとの声が聞かれた。それぞれの地域でも意見交換できるようなスキルの習得などについても本プランで促進できるといいなという意見だと思う。

事務局：地域でワークショップなどの手法をどのように展開していくのかなどの記載については、検討させていただきたい。

委　員：本編７ページ。福祉というと「自分と関係ない」と感じている方もいる。福祉はふだんの暮らしの幸せであることから、福祉が特別なことではなく、みんなに関係することであるということを子どもの頃から伝えていけるといい。ワークショップに子どもたちも気楽に参加でき、楽しく学べる機会があるといいなと思った。困った人が誰でも相談できるような関係づくりをしていく必要があると感じている。

事務局：子どもたちを巻き込んでいく視点は大事だと感じている。高良内校区のワークショップでは、小中学生が４名程参加し、発表もしてくれた。また、資料編４ページのヒアリング団体一覧にあるように、中学生へのヒアリングも実施した。大善寺校区では支え合い推進会議に中学生が委員として参加している。地域のことを知ったり、地域の方が声をかけたり、相乗効果があっている。プラン策定後も子どもや若い世代の方に読んでもらうことや、ワークショップの機会などを広げていきたいと思っている。

会　長：「見えてきたキーワード・ニーズ」や「第２期プラン取組項目」に対するご意見などもいただきたい。取組項目については、今後、評価していくにあたっての評価項目にもつながっていく予定。

委　員：日吉校区在住。自治会加入が約７割程度になっている。コミュニティとしては、自治会加入世帯にしか情報がいかない。自治会に入っていない人へどのように知らせていくかということも大事だと思う。民生委員としては、自治会加入の有無に限らず対応している中で、お知らせなどをしている。５年程前から、介護予防教室を民生委員が中心となって実施している。自治会に入っていない方が参加し、自治会加入につながった方も２件ほどあった。自治会に入っていない人に対しても「居場所や交流の場」ができるといいなと思う。

事務局：自治会未加入についての課題認識はある。直接の担当課としては、地域コミュニティ課がその課題に取り組んでいるところではあるが、地域福祉課としては、自治会加入の有無に限らず地域に住むすべての人を対象とし、支え合い推進会議などと連携し、「誰も取りこぼさない地域づくり」に取り組めたらと考えている。様々な手法についても担当課とも協議しながら検討していきたい。

委　員：障害者基幹相談支援センターの業務上、子どもと関わる支援に携わっている。学校に行かない選択をする子、学校に行きたいけど行けない子たちもいる中で、本人の権利を地域としてどう吸い上げていくか。学校教育課との連携も大切だと思っている。包括的な相談支援を推進するにあたり、各機関でどこまで力を入れていくことができるのか、どこに人手を割いたらいいのかなどを踏まえて協議できたらいいなと思う。

事務局：教育分野や子ども分野との連携については、本プランとも関連が深い。市では、現在「こども計画」を策定中で、様々な意見をいただいている。包括的な相談支援を推進するにあたって、市役所内部としても縦割りを超えていくことはとても大事だと感じている。今後、部長級会議などもあるため、改めて伝えていきたい。

委　員：「こども計画」策定に際しても市民意識調査を実施された。本プランでも市民意識調査を実施している。連携して実施できたら、より深く分析ができるのではないかと思う。

事務局：市民意識調査については、広聴相談課がとりまとめている。全庁的に調査項目を集約し、重複している部分の有無なども確認し、組み合わせて調査できるものはしている。今後も効果的な調査に努めたい。

会　長：本編８ページ。中点は並列を示すものであるため、「見守り活動や交流

の場・居場所づくりの推進」が妥当ではないだろうか。

事務局：修正する。

委　員：企業や事業所などの記載についても整理してほしい。

事務局：企業は営利を目的とした団体を想定し、事業所については福祉的な支援を行う事業所などを想定しているが、今後、言葉の整理をしていく。

委　員：資料 21 ページ。「参加支援事業」枠内の「本人への定着支援と受け入れ先の支援を行う」については、どのような意味か。

事務局：記載内容については、国の記載を引用しているが、わかりにくい部分があると思われるため、今後整理したい。
参加支援事業については、AU-formal 実行委員会に委託している。願いに着目した支援など決まった形がなく、オーダーメイドで支援をつくっていくような事業である。

副会長：本編 11 ページ。「図上訓練」については、市内でどの程度取り組まれているか。合川校区では支え合い推進会議で生活支援の取組みを進めているが、意外と依頼がない。一方で、災害に対する不安がある人は多い。今後、支え合い推進会議でも取組みの検討をしていきたいと考えている。また、自治会に加入していないところで、特にゴミ出しに関するトラブルが生じることがある。情報も届きにくい。市として自治会に半強制的に加入するようなことはできるのか。例えば、アパートなどは家賃の中に自治会費が含まれていることがある。

事務局：図上訓練などを通した防災意識の醸成については、支え合い推進会議や校区コミュニティ組織、市の関係課が連携して取り組めたらと思う。
また、自治会加入については、個人の意思を尊重しなければならないということが原理原則としてある中で、行政が強制的に徴収することは難しい。地域コミュニティ課や地域の関係団体等とともに、推進していけたらと思う。

委　員：地域やコミュニティという言葉が、所属している団体や年代等によってイメージが違うように感じる。子どもから高齢者までわかりやすいものを策定していくにあたって、言葉の説明があった方がいい。

事務局：最終的には、用語集を入れることを想定している。

4　その他

事務局：次回の協議会は、11 月頃を予定。

5　閉会